

VOPバイブルスクール

基礎講座

十 戒

BIBLE CORRESPONDENCE SCHOOL

10

- 第 1 課 宗教とは
- 第 2 課 聖書
- 第 3 課 聖書の神
- 第 4 課 人間とは
- 第 5 課 救い主イエス・キリスト
- 第 6 課 救いとは
- 第 7 課 信仰
- 第 8 課 祈り
- 第 9 課 苦しみの意味
- 第 10 課 十戒 ▶ 今回学びます
- 第 11 課 安息日
- 第 12 課 死
- 第 13 課 世界の終末とキリストの再臨
- 第 14 課 教会
- 第 15 課 セブンスデー・アドベンチスト教会

BIBLE
CORRESPONDENCE 十 戒
SCHOOL

一九五四年九月、台風一五号のため青函連絡船「洞爺丸」が函館沖で沈没し、一一五五名が死亡した事故がありました。

「洞爺丸事件」という日本史上最大の海難事故でした。このとき、洞爺丸に乗り合わせたストーン牧師という宣教師が、自分の救命具を一人の婦人に渡して、自らは海の中の「もくず」と化した、という実話が残っています。

作家三浦綾子さんの処女作『氷点』の中では、「啓造」という医者がこの洞爺丸に乗り合わせています。船が難破し、啓造は海に放り出されてしまいます。そこで彼は死という極限状況に直面させられるのです。その場面を三浦綾子さんは次のように

描写しています。

「死に面したいま、地位も医学も何の役にも立たなかった。死に對して啓造は何の心がまえもなかった。いままで医師として数多くの死を見てきたはずであった。しかしそれは、他人の死であった。自分のこととして見た死ではなかった。いま、啓造は全く無力だった」。

かろうじて死を逃れることのできた啓造は、胃がいれんの女に自分の救命具を与えてやった宣教師のことを思うのでした。自分には決してできない行為をやつてのけたあの宣教師が生きているようにと願つたのでした。啓造は思います。「あの宣教師が見つめて生きてきたものと、自分が見つめて生きてきたもの

とは、全く違っているにちがいはなかった。おれは、汝の敵を愛せよという言葉は知っていた。

しかし、人を愛するというのは、スローガンをかかげるだけじゃ、だめなんだ。あの宣教師は、もつと大事な何かを知っていたんだ。単なる言葉じゃないものを知っていたのだ。言葉だけじゃなく、もつと命のあるものを知っていたんだ。

啓造の「あの宣教師はもつと大事な何かを知っていたんだ」という言葉は、私たちに非常に重みのある言葉として迫ってきます。私たちが生きていくうえで最高の価値観とは何でしょうか。私たちが人生の岐路に立って重大な選択を迫られるとき

に、その基準となっているものはいったい何でしょうか。

聖徳太子以来「和をもつて尊しとする」日本社会では、何が正しいかよりも、何がふさわしいかが問題となります。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」という表現があるように、自分の心の中ではこれは正しくないと思つても、みんながしてれば、特別何も良心の責めを感じずに生きていけるのです。みんなの動きに身を任せながら生きていくのは、ある意味では楽な生き方です。

しかし、私たちが本当の「自分の人生」を生きていくうえで「みんながそうしている」ということは、決して「自分がそう

する」という根拠とはなり得ないし、そうなるはならないのです。日本社会のように対人関係という横の関係を重要視する社会は、横軸の社会です。しかし、縦軸がなく横軸しかない人生は、ただ浮き草のように波間を漂つてしまいます。

波間に漂わない、しっかりと地に着いた生き方をするためには縦軸が必要です。時代に流されず、時代を超えて生きようとするなら、しっかりと人生の縦軸という錨が必要になってきます。神様は、人生の指針と云うべき縦軸を私たちに与えてくださっています。それが十戒なのです。

十戒

聖書に出てくる「十戒」は、一般にも良く知られています。日本語では十戒と呼びますが、外国では「デカローグ」と呼んでいます。これは「十の言葉」という意味です。

十戒とは、「人生の道しるべ」、あるいは「人生のルール」とでも言うべきものです。十戒は、決して生活規定、禁止事項を集めたものではありません。私たちが人生のいろいろな場面に直面したとき、いかなる行動をとるべきなのか、その決断の根本的土台になるのが十戒なのです。

十戒は、旧約聖書の出エジブ

ト記二〇章に書かれています。

十戒は「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」という前置きをもって始まり、まず神が罪の奴隷の中にあつた私たちを救い出してください、とたという事実が大前提になっています。希望のない奴隷状態にあつた私たちが、神の救いによって自由な者にされているという神の恵みの福音こそ、十戒全体の基礎なのです。

では、出エジプト記の記述に沿って、十戒を一通り学んでみましょう。

第一条

「あなたには、わたしをにおいてほかに神があつてはならない」。

この戒めは「神以外のものを神としてはならない」ことを教えています。神以外の何ものかが私たちの第一の関心事となるとき、その何ものかがまさに私たちの神になつていくのです。

クリスチャンの生き方は、神を第一とする生き方です。神こそが私たちの人生の至上であり、人生のすべての場面において最優先されるべきお方なのです。

この第一条は、単に最初に出てくるので「第一の戒め」なのではありません。この戒めこそが最大の戒めであり、十戒全体を規定し貫いていく思想なのです。マルチン・ルターは、この第

一条を「私たちは、すべてのものを超えて、神を畏れ、愛し、信頼すべきである」と簡潔に述べました。そして彼は、それに続く第二条以下のそれぞれの戒めの冒頭に「私たちは、神を畏れ愛するがゆえに……」と付け加えて、十戒の解説をしました。

宗教改革者カルヴァンは、人生の主たる目的は「神を知ること」であり、「神を神として崇めるために神を知ること」であると述べました。自分中心の生き方、すなわち自分の人生や幸福のために神が存在するかのよいうな生き方ではなく、自分も含めて宇宙全体が、真理である神を第一とするとき、宇宙全体の真の完成があるというのです。キリストが「まず神の国と神の

義と求めよ。そうすればこれらのものはすべて添えて与えられるであろう」と仰せになったとき、この真理を教えられたのでした。

第二条

「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈

しみを与える」。

この第二条は、偶像を作ったり拝んだりすることを戒めています。十戒が与えられた当時、イスラエルの周辺諸国においては、偶像（彫像祭儀）は一般的な習慣でした。しかし、創造主なる神は自然界を超越しておられる神であり、自然界の被造物をもって神を表現することは不可能です。神はすべてを超越されるお方であり、具体的な像では決して表現できないお方なのです。像においては、私たちは聖書の神に出会うことはできません。唯一、神の像は、「わたしを見た者は、父を見たのだ」（ヨハネによる福音書一四章九節）と仰せられたキリストにおいてのみ具体化されたのです。

第三条

「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれぬ」。

第三条は、神を神として畏れ敬うこと、そして神に対する軽薄な行動を戒めています。神のみ名を唱えるとき、神に対する真摯な態度と献身の祈りが私たちに求められているのです。それは、積極的に表現するならば、「主の祈り」の冒頭の「み名を崇めさせたまえ」という真剣な祈りになるのです。

キリストは、「わたしにむかつて『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのであ

る」(マタイによる福音書七章二一節／口語訳聖書)と仰せられました。神のみ名を口先だけで唱えるのではなく、神のみ旨を実行することが求められています。神のみ名が崇められない状況において唱えられる神のみ名は、みだりに唱えられ乱用されているのです。

第四条

「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に

主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」。

第四条は、神の創造の行為を記念して、第七日目の安息日を神との交わりの日として聖別しています。安息日を尊ぶことによつて、天地万物の創造者である神を覚えるのです。人類の墮落以後、さらに安息日は罪の贖いの象徴ともなりました。安息日は、創造主なる神と贖い主なる神を覚える日なのです。この安息日の意味については、さらに別の箇所ですく考察することになります。

第五条

「あなたの父母を敬え。そうす

ればあなたは、あなたの神、主
が与えられる土地に長く生きる
ことができる」。

第一条から第四条までは、「神と人との関係」を論じていたのに対し、第五条以降は「人と人との関係」、すなわち人間世界におけるルールを論じています。この第五条は、まさに移行部にある戒めで、人間世界のルールの最初の戒めです。聖書では、神の愛は親の愛に例えられ、神と人間との関係は親子の関係に例えられています。両親との関係は、誕生後の最初の人間関係であり、家庭は最初の社会です。人は、家庭生活で両親を敬うことを通して、神を敬い、人を愛することを学んでいくのです。

しかし父母を敬うことは、盲目的に両親に追従することではありません。第五の戒めも、十戒全体を規定する第一の戒めのもとにあります。両者が対立するときには「人間に従うよりは神に従うべき」（使徒行伝五章二九節／口語訳聖書）です。使徒パウロが「子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことである」（エペソ人への手紙六章一節／口語訳聖書）と述べている通りです。

第六条 「殺してはならない」。

第六条は、侵すべからざる人間の生命の尊厳と神聖について述べています。被造物である人間の生命は、人間に属するものではなく、その付与者なる神に

属するものです。被造物である人間は、すべて神の面前において等しく価値ある存在です。そこから他者を愛し尊重する生き方が生まれてきます。殺すという行為は他者の存在そのものを否定し抹殺することです。

キリストは『殺すな。殺す者は裁判を受けねばならない』と言われていたことは、あなたがたの聞いていたところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会に引きわたされるであろう」と仰せられました。他者に怒りを発することや他者を罵倒することは、根本的意味において他者の尊厳を傷つけ損

なう行為なのです。他者の固有の価値を認めて、その生に対して畏敬の念を持つ者は、他者を尊重し愛する者になっていくのです。

聖書は、自殺を認めていません。人間の命はあくまでも創造主なる神に属するものであり、たとえ自分の生命であっても、人間にはそれを自由にする権利はありません。「殺すな」との神のご命令は、「生きよ、そして生を全うせよ」との積極的な呼びかけでもあるのです。

第七条 「姦淫してはならない」。

聖書は結婚関係を清く保つように教え、夫婦に対して性の純潔と誠実を要求しています。聖書は結婚関係についてこう述べ

ています。「それゆえに、人は父母を離れてその妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである」。この奥義は大きい。それは、キリストと教会とをさしている。いずれにしても、あなたがたは、それぞれ、自分の妻を自分自身のように愛しなさい。妻もまた夫を敬いなさい」(エペソ人への手紙五章三〜三節／口語訳聖書)。

結婚関係がキリストと教会の関係に例えられているように、夫婦関係は相手本位の愛と自己犠牲の上に成り立っている関係なのです。

姦淫の罪は、表面に現れた不倫行為だけを指すものではありません。キリストが「だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたので

ある」(マタイによる福音書五章二八節／口語訳聖書)と仰せられたように、聖書は、姦淫の罪についてもその根本的問題を心の状態として教えているのです。

第八条 「盗んではならない」。

ここでは他人の所有物に対する欲求を戒めています。パウロはこれに関連して「また、悪魔に機会を与えてはいけません。盗んだ者は、今後、盗んではならない。むしろ、貧しい人々に分け与えるようになるために、自分の手で正当な働きをしなさい」(エペソ人への手紙四章二七、二八節／口語訳聖書)と勧告しています。

現代においては、この戒めは、根本的な意味において単に持ち物だけではなく、他人の時間や

賃金、品物を不当な手段（値段）で得ることを含めて禁じていると解釈してもよいでしょう。ルターはこの戒めを、「取引が行われて品物や仕事のために金銭のやり取りがなされるすべての場所に及ぶもの」として理解しました。

これはヤコブの「御覧なさい。畑を刈り入れた労働者にあなたがたが支払わなかつた賃金が、叫び声をあげています。刈り入れをした人々の叫びは、万軍の主の耳に達しました」（ヤコブの手紙五章四節）という警告に共通するものがあります。

第九条

「隣人に関して偽証してはならない」。

ここでは、他者に対して真理を重んじ真実を貫く態度が求められています。聖書は「あなたがたは偽りを捨てて、おのおの隣りに対して、真実を語りなさい。わたしたちは、お互に肢体なのであるから」（エペソ人への手紙四章二三節/口語訳聖書）と述べています。私たち人類すべての者は、お互いにキリストの肢体であり兄弟姉妹なのです。真実を語ることは、他者に対する誠実な態度を貫くことであり、他者を尊重することなのです。

宗教改革者ヤン・フスは「誠実なキリスト者よ、死に至るまで真理を求め、真理に聞き、真理を学び、真理を愛し、真理を保持し、真理を語れ」と述べました。聖書の真理を発見した彼

は、断固たる決意を持って当時の腐敗した宗教勢力と戦い、真理を撤回することを拒否しました。その結果、彼は真理の殉教者となったのです。

第一〇条

「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない」。

ここにおいて、十戒は直接的に人間の内部の「心の思い」を扱っています。略奪や窃盗などは、すべて他者に属するものに対する所有欲求から始まります。他者を愛する者は、他者の家庭や所有物を尊重します。

聖書は、すべての悪の根源を人の心の問題としてとらえてい

ます。キリストは「悪い思い、すなわち、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、誹りは、心の中から出てくるのであって、これらのものが人を汚すのである」(マタイによる福音書一五章一九、二〇節／口語訳聖書)と仰せられました。

カルヴァンは彼の説教の中で『欲してはならない』という命令に私たちが出会うとき、私た

自由の律法りっぽう

十戒には、人類に対する神のご意志が明らかにされています。この十戒は私たちの歩むべき正しい道を指し示しているからです。しかし、この戒め通りに生きることは、私たちの力では実行不可能なことです。十戒に従

ちの内側にあるすべてのものがあらわにされ、自覚させられる。たとえ、私たちが罪であると考えなかったことでも、神は目の前で行われたことのように、裁き咎めるのである」と述べています。このように、この戒めは、外面的なものではなく、私たちの心の奥底に潜ひそんでいる欲望を戒めているのです。

う道は、神の恵みと救いの事実があつて初めて私たちの現実となりうる道なのです。神の恵みと救いの中に生き続ける時にのみ、私たちに望みがあり、自由があるのです。十戒とは、決して私たちが救われる条件ではな

く、神の救いに対する私たちの応答なのです。

十戒は、第四条の「安息日を心に留め、これを聖別せよ」と第五条の「あなたの父母を敬え」以外は、すべて「……してはならない」という禁止命令に訳されています。しかし、この十戒のヘブライ語の原文は否定詞「ロー」に未完了形すいりようのついた形で、元来の意味は「否定の推量」です。すなわち「……しないであろう」と訳すべきだと言えます。これは「……するはずはない」、あるいは「……することはありえない」と言い換えることもできるのです。

例えば、第一条は「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」となってい

ますが、これは「あなたは、わたしをおいてほかに神としないであろう」、あるいは「神とすることはありえない（神とするはずがない）」となります。「殺してはならない」は「殺さないであろう（殺すはずがない）」、「姦淫してはならない」は「姦淫しないであろう（姦淫するはずがない）」なのです。十戒は禁止事項ではなく、神に従う者の必然的な結果としての状態を述べているのです。

イスラエルの民に与えられた十戒の前提は、エジプトでの奴隷状態から神の恩恵^{おんけい}によって救い出されたという事実に基づいています。それは、一般的に表現するならば、十戒が与えられている前提は、あくまでも神の

愛と救いを体験しているということなのです。

神学者ロツホマンは、十戒を「自由への道しるべ」、そして「十の大きな自由」と表現しています。私たちは、神の愛と救いを体験するときに、おのずと戒めを守る者に変えられていきます。その意味において、罪に支配されない自由へと導かれて

十戒の役割

一、罪の状態を指摘する

律法は私たちに罪を指摘します。律法によって、私たちは初めて自分の現実の姿すなわち罪に汚れた自分を知るようになるのです。

「律法によらなければ、わた

いくのです。

詩編記者は律法について、「わたしはあなたの律法をどれほど愛していることでしょうか。わたしは絶え間なくそれに心を砕^{くだ}いています。あなたの戒めはわたしを敵よりも知恵ある者とします。それはとこしえにわたしのものです」（詩編一一九編九七、九八節）と述べています。

しは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。ところが、罪は掟^{おきて}によって機会を得、あらゆる種類のむさぼりをわたしの内に起こしま

した。律法がなければ罪は死んでいるのです。わたしは、かつては律法とかわりなく生きていました。しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、わたしは死にました。そして、命をもたらずはすの掟が、死に導くものであることが分かりました。罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまったのです。

こういうわけで、律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。それでは、善いものがわたしにとつて死をもたらすものとなったのだろうか。決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらしたので

す。このようにして、罪は限りなく邪悪じやあくなものであることが、掟を通して示されたのでした」
（ローマの信徒への手紙七章七〜三節）

神の律法は、私たちの罪に汚れた無力な状態を示します。
「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありませんが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行つてい

る。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしていくのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいく罪なのです。

それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまるとつ

ているという法則に気づきます。『内なる人』としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めみじな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救つてくれるでしょうか」（ローマの信徒への手紙七章一八〜二四節）。

二、救い主の必要性を示す

「なぜなら、律法を実行することによつては、だれ一人神の前で義とされないので。律法によつては、罪の自覚しか生じないので。ところが今や、

律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証りつしょうされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯おかして神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償つぐなう供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」(ローマの信徒への手紙三章二〇〜二五節)。

キリストの十字架は、神の正義を貫き律法(十戒)を確立しました。同時に、罪ののろいを取り去り、キリストを信じる者を律法の有罪宣告から解放しました。律法の前に死と定められた私たちに対して、すなわち救われる希望のなかった人類に対して、愛なる神は御自ら、キリストを遣つかわされ、キリストの十字架の犠牲によって救いの道を開いてくださったのでした。十字架において神の愛と義が貫かれたのです。十字架こそ、まさに文字通り、神の正義と愛の交わる所なのです。

「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身

は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御み子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断しよだんされたのです」(ローマの信徒への手紙七章二五節〜八章三節)。

「神は、独ひとり子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛

がわたしたちの内に示されまし
た。わたしたちが神を愛したの
ではなく、神がわたしたちを愛
して、わたしたちの罪を償うい
けにえとして、御子をお遣わし
になりました。ここに愛があり

「神への愛」と「人への愛」

第一条から四条までは、神に
対する私たちのあるべき関係、
すなわち神と人との関係を述べ
ています。これを縦軸の関係と
言うことができます。第一、第
五条から十条は、私たち人間ど
うし、すなわち、人と人との関
係を述べています。これを、横
軸の関係と言うことができます。
これらは、それぞれ、「神への
愛」と「人への愛」と言い換え

ます。愛する者たち、神がこの
ようにわたしたちを愛されたの
ですから、わたしたちも互いに
愛し合うべきです」（ヨハネの手紙
一・四章九〜一節）。

ることができます。

キリストは、十戒を二つに要
約して、「第一の掟は、これだ
ある。『イスラエルよ、聞け、
わたしたちの神である主は、唯
一の主である。心を尽くし、精
神を尽くし、思いを尽くし、力
を尽くして、あなたの神である
主を愛しなさい。』第二の掟は、
これである。『隣人を自分のよ
うに愛しなさい。』この二つに

まさる掟はほかにない」（マルコ
による福音書二二章二九〜三二節）と仰
せられました。

キリストは「隣人を自分のよ
うに愛しなさい」と教えられま
した。本当の意味において自分
を愛することができる者のみが、
他人を愛することができます。

自分自身を受け入れ肯定できる
人は、他人をもそのまま肯定し
受け入れることができます。自
己を受容できて初めて、他人を
受容できるのです。逆に、自分
が自分であることに不安を持つ
者は、他人を受け入れることが
できず、批判的また攻撃的にな
ります。ゆえに、エーリツヒ・
フロムはその古典的名著『愛す
ること』の中で「自己自身
身に対する愛の態度は、他者を

愛することのできる人すべてに見られるものである」と述べるのです。

キリストが、「善いサマリア人」のたとえ話をされたのは、この言葉との関連からでした。

「すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。『先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。』イエスが、『律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか』と言われると、彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。』

イエスは言われた。『正しい答えだ。それを実行しなさい。』

そうすれば命が得られる。』しかし、彼は自分を正当化しようとして、『では、わたしの隣人とはだれですか』と言った。

イエスはお答えになった。

『ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲おそわれた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。あの祭司さいしがたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所に行って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、そ

の人を見て憐あはれに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱かいほうした。

そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います。」

さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。』

律法の専門家は言った。『その人を助けた人です。』

そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』（ルカによる福音書一〇章

二五〜三七節）。

十戒は「神と人を愛する」ことであり、それは究極的には「愛」に集約されると言ってもいいでしょう。神を愛する者がどうして、神以外のものを神とすることができのでしょうか。人を愛する者が、どうして人を殺したり、姦淫したり、また盗んだりできるのででしょうか。

作家の太宰治は、キリストの言われるこの愛と苦闘した人でした。彼は「私の苦悩の殆ど全部は、あのイエスの言う『己れを愛するがごとく、汝の隣人を愛せ』といふ難題一つにかかっていると言ってもいいのである」と書いています。彼はまたこう書くのです。「しかし己を愛するが如く隣人を愛するということとは、とてもやりきれるも

のではないと、この頃つくづく考えてきました。さういふ思想はただ人を自殺にかり立てるだけのものではないでしょうか。彼は、キリストの言葉との激しい格闘の末、ついには自殺という破滅への道を歩んでいったのでした。彼の悲劇は、キリストの言われる第一の戒めをおろそかにして、第二の戒めを守ろうと努力したことにありました。

聖書はこう述べています。「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださいさったからです。『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することが

できません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です」(ヨハネの手紙一・四章一九～二節)。

神の戒めの大前提は、まず神の愛が人に注がれているという事実です。私たちは、決して自分の努力で人を愛することなどできないのです。神の愛を受けられないのは、神と人を愛することは不可能です。神の愛が注がれて初めて、私たちは神を愛することができるのであり、そして人を愛する者に造り変えられていくのです。第一の戒めすなわち、神との関係を正しく持つとき、その結果として第二の戒めを守る者に変えられていきます。ゆえにアウグスチヌスは「心に愛を持て。しかして汝

の欲することを「行え」と言うのです。

その意味において、創造主なる神を愛し畏れることは、隣人を愛し尊ぶことになります。私たちがキリストの救いを体験するとき、神の恵みによつて新しい義なる生活を送ることができるようになるのです。

愛は律法を全うします。戒めを守ることは、愛を実行することであり、愛を実行することは、すでに戒めの要求を満たしていることになるのです。キリストの愛の内にいるならば、私たちの人生は喜びに満ちあふれたものとなり、神と人を愛する者へと自然に変えられていきます。

「もしわたしのいましめを守

るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである。わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」(ヨハネによる福音書一五章一〇〜一二節/口語訳聖書)。

神の愛の象徴である十戒は、神の愛と共に、永遠に続きます。キリストは仰せられました。

「わたしが来たのは律法や預

言者を廃止するためだ、と思つてはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はつきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点^{いっぺん}一^{いっぺん}画^かも消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる」(マタイによる福音書五章一七〜一九節)。



問題1 十戒とはどのようなものですか？

1. 生活規定や禁止事項を集めた「人生の指針」
2. 人生の決断の場面での根本的土台となる「人生の道しるべ」
3. 「みんながそうしている」という10の言葉を集めたもの

問題2 十戒が与えられている前提は何ですか？

1. 私たちの力で実行する決意があること
2. 私たちが救われるための条件であること
3. 神の愛と救いを体験していること

問題3 十戒の役割は何ですか？

1. 神の正義を貫き、律法を犯すものを断罪すること
2. 私たちの罪を指摘し、救い主の必要を示すこと
3. 神が恵みによって罪を見逃してくださることを示すこと

問題4 神の律法を全うし、戒めを守るとはどんなことですか？

1. 律法や預言者を廃止すること
2. 自分自身を受け入れ肯定すること
3. 神と人への愛を実行すること

問題5 どうすれば十戒に書かれているように神と人を愛することができると思いますか？

VOPバイブルスクール 基礎講座 第10課 十戒

2003年10月15日 初版第1刷発行
2008年6月1日 初版第3刷発行
2013年3月1日 新装版第1刷発行
2022年3月15日 新装版第4刷発行

〒241-8501 横浜市旭区上川井町846 045-921-1416(電話) 045-921-2319(Fax)

